ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.5 May 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

5

CONTENTS

- 巻頭言
  信者の定義
  ／永尾教昭 1
- 「おさしづ」語句の探求（40）
  「おさしづ」第５巻における本部事情と「道」
  ／澤井治郎 2
- 日本語教育と海外伝道（22）
  歴史の中の留学生①
  ／大内泰夫 3
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（20）
  深淵を覗く―人間における不安と自由と可能性とは
  ／金子　昭 4
- イスラームから見た世界（２）
  おやさと研究所とイスラーム②
  ／澤井　真 5
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（33）
  大統領暗殺事件②
  ／森　洋明 6
- 遺跡からのメッセージ（57）
  世界共通の危機に際して、新入生、在学生へのメッセージ
  ／桑原久男 7
- 現代宗教と女性（27）
  COVID-19 とジェンダー
  ／金子珠理 8
- 天理参考館から（20）
  スポーツの歴史と文化（1）「走る」その１
  ／幡鎌真理 9
- 図書紹介（117）
  復興・宗教・ニューカマー―三木英の近著に見る宗教社会学の最前線―
  ／金子　昭 10
- おやさと研究所ニュース 11

新刊紹介／ 2020 年度公開教学講座の案内

巻頭言

信者の定義

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

海外で布教している日本人布教師は、教えを求めて自らの布教拠点に足を運ぶようになった人を、当然「信者」にしたいと考える。適切な表現かどうかわからないが、信者であるという「お墨付き」を与えようとする。それが国内ならば、ぢばに帰り別席を運んでもらう。イニシエーションがない天理教では、事実上、別席受講がイニシエーションになっているからだ。したがって海外でも、結局、いきなりぢばに帰ろうという話になりやすい。しかしながら、一般的には、その宗教の信者であるとお墨付きを得るために、いきなり高額を払って飛行機で外国まで行かねばならないなどということは考えにくい。かなり無理がある。発展途上国なら、なおさらだろう。時には、日本人布教師が費用を出し、日本に連れていくという例も少なからずある。いずれ触れたいと思うが、別席の話は本来入信するための話ではない。

また信者共同体をどうオーソライズするかという問題もある。天理教の特徴は、いくつかの例外を除いて、教団が布教師を派遣して布教するという形ではなく、信者共同体、つまり「講」といったものが自然に結成され、それが媒体となって教えが伝播されていったところにある。教祖も「講を結べ」とその結成を促している。

最初期は、まだ今日のような教団組織が整備されていたわけではないので、自然にできていった講に、どうオーソライズするかといった問題は起こらない。

やがて、真明組、斯道会といった有力な講ができていき、その際には教祖の許しが、すなわちオーソライズであった。それからその配下の講、例えば斯道会の場合、斯道会第〇号といったように番号が振られていくのであるが、それに際しては斯道会のいわば創立者である深谷源次郎がその結成許可を出している（註）。

さらに進んで、教祖が身を隠した後、天理教は教団として整備され、講は「教会」となっていく。教会の場合、法的手続きは別として、信仰的には「おさしづ」を仰ぎ、認可されるという形になっていく。

海外でも、本部海外拠点は例外として、上記の日本国内での発展経過同様、信者がいわば自発的に信者共同体を結成し、それが成長して教会となっていくという道をとっている。

日本人布教師（つまり「ようぼく」という資格のある者）が、永遠に信者を集め導いていくというのなら話は別だが、いずれ現地の人で共同体を作り、そこで教理理解を深め、つとめを勤修し信仰的成人を遂げていかねばならないのは自明の理だ。まさにその場合、そのスタート地点である信者共同体を誰がどのようにオーソライズするのかが問題になってくる。実際、筆者は約30年前にコンゴブラザビル教会に赴任し、また海外部ではヨーロッパ・アフリカ課長を務めたが、教会にやや遠方から参拝に来る信者たちが、自分たちの地元で共同体のようなものを作り、日々、つとめを勤めたり、信仰的な会合を持ちたいと希望してきた。しかし、天理教にはイニシエーションがないから何をもって信者と言うのかという問題もあり、それをどう認可するのか悩んだ。

代表者が天理に帰り、「ようぼく」になればいいということも言えるが、上述のようにコンゴのような発展途上国の場合、いきなり、彼らがぢば、つまり日本の天理まで飛行機に乗ってくることは金銭的に非常に困難である。

したがって、とりわけ海外の場合、信者であると定義する「何か」が必要になると思う。

［註］『天理教河原町大教会史』第一巻参照

「おさしづ」語句の探求（40）

「おさしづ」第５巻における本部事情と「道」

天理大学人間学部講師
おやさと研究所研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第５巻（明治33～34年）の本部事情における「道」の用例を整理する。第５巻には本部事情の「おさしづ」が48件ある。そのうち、「道」が用いられるのは27件、３回以上「道」が繰り返し用いられるのは19件である。

この時期には、内務省宗教局長の「教義等も十分に組織して、十分の準備を整えて掛からねば到底駄目だ」（『稿本中山眞之亮伝』276頁）との言葉を受けて、一派独立を目指して教義や組織の整備が進められた。そうしたなかに、「この道は……」と、この道を通るうえで大事な点を諭される「おさしづ」がたびたび出てくる。以下ではその内容を確認することにしたい。

この道というは、よう聞き分けくれにゃならん

高井つねという個人の身上に関する「おさしづ」において、皆が揃って尋ね出るようにとの言葉をうけて、次の「おさしづ」は伺われたものである。

「この道というは、よう聞き分けくれにゃならん。何処から出来たか。どれだけどうこれだけこう、たゞ一つ理遠く所によらず、一つ理から出来た。そこでどんな者掛かったてこんな者掛かったて、理に外せば、もの纏まる事出けん。そこで、よう聞き分け。これから一つ何よの事も、何人あれど一人も残らず、又中に不参ある。不参あれど、後から話（はなし）すれば同じ事、皆惣々中に映す。一人も残らず、それより決議を取りて、どうして貰いたいこうして貰いたい、と言えば、神が守護働きする。心そも〳〵では働かりゃせん。たといどういう事すれど、皆道具というもの揃わにゃならん。道具揃わにゃ日が遅れる。あちらへ借りに行けば無い、こちらへ借りに行けば使うてる、そちらへ行けば損じたる。道具揃わにゃ出けんは理。難しい事言わん。仮名な事諭し置く。皆心治まり第一。」（さ33・10・20　一昨夜高井つね身上のおさしづより、本部員一同打ち揃うて願）

ここに、「この道というは、よう聞き分けくれにゃならん」と仰せられて、教義や組織を整えるなかで、大事な点が諭されている。それは大きく分けて二つあると思われる。一つは、「この道」は「何処から出来たか」ということである。もう一つは、「一人も残らず」あるいは「皆心治まり第一」ということである。

この道というものは、どういう処から成り立った

一つ目の、「この道」が「何処から出来たか」ということについて、「一つ理から出来た」と言われ、その「理に外せば」、どんな者が取り掛かったところで何もまとまらない、と諭される。現状の元になっているものをしっかりと心に治めることが説かれる。似たような諭しに、次のようなものがある。

「この道というものは、どういう処から成り立った。遠い所高い所は何にも分からせん分からせん。一時に出来た道やない。細い道から出来たもの。そこで、もう遠からず道見えるで。心しっかり持って、皆んなの綺麗な心より働きする。……上（かみ）さえさあと思うたらこれで結構、と思うなれど、この道は容易では行かん。容易では成り立たん。」（さ33・7・14　天理教別派独立の件に付内務省へ書面差し出し置きし処、……御許し下されますかと願）

この伺いにおける差し当たりの関心事は一派独立ということであるが、この「おさしづ」のなかでは「この道」は、単に上（行政当局）の認可が下りればよいというものではなく、「細い道」からだんだんと容易でないなか成り立ってきたということを、しっかり心に持って奇麗な心になるように促されている。同様のことは次の「おさしづ」にも説かれている。

「この道というは、不自由勝難儀仕勝、何言うも彼（か）言うもあろうまい。この道の初め三十八年あと勤め場所〳〵という。だん〳〵世界という。今一時やない。年限数えば、三十八年あとからだん〳〵精神定めて通り来た者、何人あるか数えてみよ。調べてみよ。こゝまで作り上げるは容易やない。何か小さいものから、何も要らん〳〵と言うて、それから出けたる道。」（さ34・10・13　教校教室二棟出来上りに付、後へ事務室二十間に五間物を建築致し度く願）

このように、「不自由勝難儀仕勝」のなか、「何も要らん」というところから年限かけて成り立ってきたことに照らして、一時にどうしようというのではなく、先を楽しみに歩みを進めるよう諭される。

この道は人間心で動かせはせん

したがって、皆の心が「この道」の元の成り立ちに沿っていることが肝心である。これが、二つ目の点である。前掲の明治33年10月20日の「おさしづ」に「心そも〳〵では働かりゃせん」とある。「そも〳〵」というのは、“それぞれに勝手な”というような意味である。皆が勝手な思惑を立てて心が一つに治まっていなければ、神は働けないと説かれている。また、別のところでは次のように言われる。

「この道はどんな者でも、人間心で動かせるか。動かせはせん。神の道やで〳〵。年限の道からこうのうの理である。天然というものは、一寸には出来たものやない。」（さ33・11・5　大裏へ三間四間建家仕事場のように建てるのを、……並びに中西牛郎は学校専務として御許し願）

「この道」は、たとえどんな者でも人間心では動かせない、と説かれる。これまで「不自由勝難儀仕勝」のなか、年限かけて道が成り立ってきたのは、神が付けてきたからだと言われる。道の発展を考えたとき、それぞれが勝手な思惑を立てるのではなく、この道が成り立ってきたこと、神によって連れて通っていただいての今であることを再確認し、教えをしっかり心に治めることが大事であると諭されている。

このように、第５巻の本部事情における「道」の用例では、一派独立にむけた歩みを進めるにあたって、この道の成り立ちを心にしっかり持ち、皆がそれに心を合わせて通ることを強調されている。これは、前回までに取り上げた刻限や本席身上願において説かれていることとも相通じている。

歴史の中の留学生①

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

パラオの留学生

皆さんはパラオのエラケツという人物をご存知だろうか。実は筆者も全く知らなかったのだが、天理教の日本語教育を語る上で外せないと思い、紹介することにした。連載を始めてから日本語教科書について調べている頃、日本語教育研究者の河路由佳氏からエラケツについて何か情報があればと尋ねられた。エラケツは昭和の初め頃に天理に滞在し、天理教の学校にも通っていたということで、早速、天理教海外部アジア一課に問い合わせたところ、佐藤庄司元課長の残した資料が残っていると聞き、この資料のコピーを入手した。その後、天理教海外部翻訳課の山西弘朗部員がエラケツに関する研究をしているという情報を得て、同部員を河路氏に紹介し、筆者もエラケツに関する資料を読み始めた。その結果、これは一つのドラマを読んでいるようにも思い、後世に生きる我々に感動を与えるものだとも思った。その後、山西部員より河路氏と共に、奈良市菖蒲池にある東洋民族博物館と奈良大学を訪問するという連絡があり、2019年9月筆者も同行し、新たな資料も入手することができた。前置きはこれくらいにして、集まった資料をもとに話を進めたい。

留学生エラケツ

奈良大学博物館企画展「好奇の人・北村信昭の世界『奈良いまは昔』展」のパンフレットによると、エラケツという人物は、天理教による第1回の内地留学生として1929年(昭和4)に来日し、4年間にわたって天理教の教理と日本語を学んでいたとある。昭和の初め頃に天理に留学生が来ていたことも驚きだが、エラケツは教内・教外を問わず、多くの日本人と交流し、友情を温めていたようだ。なかでも奈良・猿沢池畔で写真業を営み、奈良の文化人と言われた北村信昭と深く交流していた。筆者が奈良大学を訪問した際、文学部国文科の光石亜由美教授と木田隆文教授からエラケツに関する資料を見せていただいた。その中に、北村に宛てた膨大な量のエラケツ直筆の手紙や葉書があった。それを読んだだけでも、エラケツの日本語力が並はずれたものであったと感じた。昭和4年といえば、天理市がまだ山辺郡丹波市町と呼ばれていた頃である。遠い南国の島から来た一人の留学生がどのように流暢な日本語を習得し、日本人の友人たちと友情を育んでいったのか興味深いところである。

佐藤嘉一の導き

まだ旅客機も飛んでいない時代、そもそもエラケツはどういったことがきっかけで日本へ来たのだろうか。アテム・エラケツ（Atem Ngiraked、日本名：佐藤栄吉）は1910年パラオのバベルダオブ島カイシャル村ガシヨール（現エサール州、旧清水村）に生まれた。実父の名前はエラソプ、母がコロール島の南部大首長アテム・アイバドルに嫁し、エラケツはアテム・アイバドルの養子となった人である（『奈良大学パラオ研修報告書』奈良大学文学部地理学科2016）。また、天理教海外部アジア一課に「東南アジア伝道資料調査稿（6）」という、歴代のアジア一課長及び課員による南洋諸島での布教に関する記録が残されているが、それによると、最初にエラケツに布教したのはパラオ教会を設立した佐藤嘉一（東肥分教会：現在の東肥大教会）とある。写真はハッピ姿で右襟に郡山大教会と書いてある。当時、東肥大教会は郡山大教会の部内教会であり、エラケツも上級の郡山大教会のハッピを着ていたようである。

ハッピ姿のエラケツ（左側）
（奈良大学図書館所蔵）

佐藤嘉一は19歳の時におさづけの理を拝戴して入信していたが、熱心な信仰ではなかったようだ。しかし、日本郵船の船員だった時に盲腸を患い危篤状態になったが、不思議にも助かり、それから熱心に信仰を始めたようだ。昭和3年4月1日に幸夫人と共に海外布教を志し、日本の委任統治領でパスポートの要らなかったパラオへ旅立った。そしてコロールで熱心に布教を開始した。救済の実が次々と上がり、瞬く間に300人近い信者が来るようになって、同年9月24日にパラオ教会を設立した。しかし、佐藤嘉一はその時、教会長としての資格がなく、夫人の幸が初代会長になった。その後、嘉一も資格を得て、昭和6年にパラオ教会の2代会長になった。このパラオ教会は現地の人々を布教対象にしていたので、金銭面での教会維持がなかなか思うように行かず、昭和13年に教会の名称を一旦、教会本部に預けることになった（山西弘朗「日本統治下パラオにおける天理教の布教活動」『天理大学おやさと研究所年報』第26号 2020: 39～40頁）。

日本の統治下にあった南洋群島では、軍政時代（1914～1918）、民政時代（1918～1922）、南洋庁施政時代（1922～1945）の3期にわたって日本語教育が行われていたようだ（関正昭『日本語教育史研究所序説』スリーエーネットワーク、1997：26頁）。昭和3年（1928）といえば南洋庁施政時代に当たり、現地住民の通う公学校で日本語教育が行われた時代である。そのため、布教も日本語で現地の人たちに行われていたのだと推測できる。エラケツも来日前に基礎的な日本語教育を受けていたのであろう。その素地があったので、来日後もどんどん日本語に磨きをかけて多くの日本人とも交流を深めていたのだと思われる。

日本留学のきっかけ

エラケツの来日に関して調べていると、天理教兵神大教会の後継者であった清水芳雄の名前が出てきた。教内の高まる海外布教に際して、昭和2年に天理教教会本部に海外布教伝道部（現海外部）が設置されたが、海外の教会設置の諸手続きを担当していたのがこの清水芳雄である。清水は昭和4年にパラオへ渡り、佐藤嘉一と共に布教を開始したが、コロールで身の回りの世話や布教に随伴したのがエラケツである。清水はエラケツを弟のようにかわいがり、その素直な性格を見込んで、天理へ連れて帰り、天理教人として育てたいと思い、必ず天理へ連れて行くと約束したのである。そして日本人も多く、南洋庁のあるコロールから現地人への布教を目指し、パラオ本島のマルキヨクへ向かった。しかし、悲しいことに清水芳雄は志半ばにしてデング熱に罹り、27歳の若さで亡くなってしまった。パラオに渡り、わずか3カ月後のことである。その無念さは計り知れないものがある。パラオにこの清水芳雄の殉教碑が建てられているが、今でも現地の人からは「Tenri」と言えばこの碑のことだと言われているそうだ。

深淵を覗く―人間における不安と自由と可能性とは

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

大審問官の物語から

舞台は 16 世紀スペインのセビリア。そこに「彼」は突然姿を現した。不思議なことに、だれもがその正体を知ってしまう。人々は「彼」の周囲を取り囲み、「彼」もまた人々に祝福を与える。その姿を建物の蔭からじっと見つめる老人がいた。大審問官である。大審問官はただちに「彼」を捕え、神聖裁判所の牢獄の中で尋問する。「なんだってお前は今頃出てきたのか。お前には、お前が昔語ったことに何一つ付け加える権利は無いはずだ。」大審問官もまたその正体を見抜いていた。

大審問官は尋問を続ける。「我々がせっかく愛情をもってお前の偉業を修正し、自由の代わりに幸福を置いたにもかかわらず、お前は人間の心に再び自由の苦痛を負わせたいのか。人間の幸福は、奇蹟と神秘と権威の上に築かれるものである。お前が我々の邪魔をするのであれば、我々は明日にでもお前を異端者として火刑にできるのだぞ。」

尋問される間、「彼」は最初から最後まで沈黙を守っている。そして無言のまま、大審問官にキスをすると、そのまま夜の広場へと去っていく。

以上は、有名な「大審問官」（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』第２部第５編最終章）の粗筋である。無神論者のイワンが見習修道士の弟アリヨーシャに語って聞かせる創作物語だ。「大審問官」は、宗教文学や宗教哲学においてさまざまな議論を呼んできた。奇蹟、権威、神秘。大審問官の語るこの三つのものは宗教の本質をなす。人間はこの三つのものに我が身を委ねる。それが宗教的信仰に他ならない。宗教はこの三つのものを通じて人間に幸福をもたらした。しかし、その代償として、人間は自らの主体的な自由を見失った。「彼」はもう一度、その自由を与えようと、人々の前に現れる。大審問官はそれを断固阻止しようとする……。

この物語の中では、自由をめぐって三重のパラドックスが語られている。一つ目は自由と幸福が対置されるというパラドックス。二つ目は自由が人間にとって苦痛であり重荷であるというパラドックス。そして三つ目は、「彼」すなわちキリストこそ、人々にその自由をもたらすために現れたというパラドックスである。文学作品として、人間的実存における自由の問題を、これほど深く取り上げたものはないであろう。

不安は自由の眩量（めまい）である

人間が人間である限り、常に希求されるのが自由である。しかし、自由は人間をたえず不安におくものだ。身近な例で考えてみよう。飛行機は、空港に着陸する前、地上に近いところを水平飛行する。高度 100 メートルといえば着陸寸前の高さである。100 メートル下の地面がどんなに間近に見えようとも、我々は安心感を持って地上の様子を見下ろすことができる。乗客として安定した機体の中に座っているため、自ら落下することは絶対にないからだ。しかし、同じ 100 メートルの高さでも、高いビルの屋上の端から真下にある街路を見下ろした場合、話は全く異なる。どんなに強固な足場に立っていたとしても、どこか不安を覚えるのではないだろうか。不安の原因が 100 メートルの高度に、つまり外部にあるのではないことは確かだ。それはむしろ内部に、すなわち、もしかしたら何かのきっかけで自ら落下してしまうのではないかという恐れの中に見いだされる。その恐れがほんの僅かな可能性しかなくても、それはやはり可能性なのである。自由とは可能性と結びついた概念である。そして、人間が自らの内なる自由を意識した時に感じる一種の眩暈。それが不安なのである。

深淵を覗き込むときに不安が生じる。キルケゴールは、『不安の概念』においてそのように述べた。深淵とは別言すれば罪であり、深淵への転落とは堕罪であるというのが彼の見方である。深淵を覗き込む人間は、堕罪前の無垢な人間（アダム）の姿になぞらえられる。堕罪後に生きる我々自身にあっては、罪は“原罪”と化している。それゆえ人間の可能性もまた、アダムにおけるような空想的な可能性ではなく、絶えず我が身を責め苛む現実的な可能性となっているのである。だが、そのように見た時に、深淵はもはや単なる罪ではなく、人間の可能性の謂いにもなっていると言えるだろう。

自由の可能性は人間の無限性を意味する。人間は霊的（心的）なものと身体的なものとの総合であり、この両者を統合する第三者が精神である。人間とは本質的に精神として措定された存在である。これがキルケゴールの人間観だ。精神が自らの自由の可能性という深淵を覗き込み、恐れを感じてなにか有限なものにしがみつこうとする。そこに、不安が自由の眩暈となって現れるのである。

不安を正しく学ぶこと

イワンの語る大審問官は、異端者を厳しく告発し、時に火刑に処する迫害者である。しかし、この大審問官は「彼」を夜の広場の中に釈放してやる度量を持っていた。一方、不安はどんな大審問官も及ばないほど、どの人間に対しても容赦なき迫害者である。人間が人間であろうとする限り、不安という苛斂誅求から逃れることはできない。

けれども、不安というものを正しく学んだ者は、人間の可能性、すなわち自らの無限性により強化育成されることになる。この者にとっては、どんな現実も恐ろしくはない。なぜならどんな現実も現実であるかぎり、それ自体無限性である可能性とは違って、本質的に有限なものだからである。それゆえ、人間は自らの持てる力をそこに集中させて対応することができる。そして、何よりもキルケゴールによれば、不安を正しく学ぶことで初めて“贖罪”の道を歩むことが可能になり、そこに真の意味での宗教（キリスト教）の道が開かれるというのである。

奇蹟、権威、神秘。これらの中に安住することができれば、確かに人間は幸福であるかもしれない。だが、宗教的信仰として果たしてそれで良いのであろうか。内なる自由というものを我々が今一度自覚し、これを掘り下げることで、もしかしたらより深い次元での宗教的信仰を見出せるのではないだろうか。「大審問官」においては、自由と幸福は二律背反の関係にあった。しかし、宗教的信仰における真の幸福があるとすれば、それはまさに自由に裏付けられたものになるのではないだろうか。

おやさと研究所とイスラーム ②

天理大学おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

天理教亜細亜文化研究所の理念とイスラーム

「海外伝道に関する後方の参謀機関」の役割を担うべき存在として、天理教亜細亜文化研究所は創設された。開所にあたって、中山正善２代真柱は、「回教」という語でイスラームに言及しながら、以下のように挨拶を行っている。

> 具体的に言うと、回教を取上げて研究する場合、回教が異民族伝道に対しては如何なる対策を講じたかを研究することは容易であっても、回教圏に本教が立入る場合には、然らば如何なる対策を講ずべきか、根強い回教の伝道対策なり、信仰なりに圧倒されることなく、そこには如何なるウィーク・ポイントがあるか、そのウィーク・ポイントを衝くには如何にすべきかと云ふところまで掘り下げることが大切である。(1)

明治時代に入るまで、イスラームはほとんどすべての日本人にとって全く馴染みのない宗教であった。明治維新以後、外国人居留区を中心に居住しはじめた外国人のなかに、ムスリム（イスラーム教徒）たちも含まれていた。イスラームもまた、「回教」という名称が中国経由でもたらされ、人口に膾炙するようになった。日本に最初に建設されたモスクをめぐっては諸説があるが、一般的には 1935 年に建てられた神戸モスクであると言われている。言い換えれば、それ以前の日本でモスクを目にする機会がなかったと言える。しかしながら、２代真柱はイスラームの影響力を十分に認識していた。その背景には、中国への巡教における２代真柱とイスラームとの出会いがあった。

旅と２代真柱

２代真柱の海外巡教に際しては、巡教のたびに視察した各地についての記録が出版されている。初めての巡教記録である『鮮満支素見』（1927 年）をはじめとした詳細な記録は、日本における中国研究や、日本イスラーム史の観点からも一級品の史料である。それは、当地の宗教情勢について、人名をはじめとした詳細な記録だからである。

２代真柱による旅として、『六十年の道草』の序文における中山善衛３代真柱の回顧に言及しておきたい。

> 一般に、憩いを求めて本を読み、旅し、人と交わるというが、父は自分だけの楽しみに本を集めたとも、身体を休めるために旅をしたとも、私には思えない。
>
> 布教に役立てるために本を読み、集める。教祖の教えを伝え、苦悩から救われる道があることを教えるのに、人の考え方の発想が理解できなければ、それぞれの人に満足して貰える話し方が出来ないというもので、父は人に喜んで貰いたいために、本を集めたことと思う。
>
> また、巡教の地に赴くために動くことを、人は旅という。父の旅とは、親神様がお出張りくださっている土地へ足を運ぶことであり、その道中で見聞することで道の広め方を頭に画き、土地土地で起るかも知れない問題点を早くから想定して、道を誤る人がないように心を働かせていたのだろう。(2)

布教を想定しながら本を読み、天理教の海外伝道を念頭に置きながら、「旅」した２代真柱が、イスラームと実際に出会ったのは中国だった。また、少なくともモスクなどのイスラーム建築を初めて目にしたのは、中国におけるモスクだった。

中国大陸と朝鮮半島へ渡った天理教徒たちの巡視のため、２代真柱は、昭和元（1926）年以降、頻繁に巡教を行った。巡教記録は『天理時報』に掲載され、さらに刊行物としても出版されることで、現地に赴いていない天理教信者たちの目にも、当地の様子が伝えられた。昭和５年、２代真柱は３月２日から４月 15 日まで中国巡教し、その後には当地で収集した中国の風俗を展示した支那風俗展覧会が開催されている。これが契機となって海外事情参考品室が設立され、現在の天理参考館の創設へとつながっている。

山澤為次の「日記帳」より

『上海から北平へ』（1934 年）は、昭和５年の海外巡教の記録であるが、宗教情勢についての記録書でもあった。そこには、当時の中国で活動していたキリスト教団体などの記録とともに、「清真寺」と題された項目がある。この清真寺とは、イスラームのモスクを指す中国語である。『上海から北平へ』には、２代真柱一行が 1930 年４月６日の午後１時に、当時、中国で活動していた川村狂堂の案内でモスクを訪問したことが記されている。ただし、２代真柱に随行した山澤為次の「日記帳より」によると、２代真柱一行はそれ以前にもモスクを訪れていたようである。以下は、天津で書かれた記録であると推測される。

> 三月三十一日　月曜　晴天
>
> 午前中、支那人街の清真寺（回教）を御視察されることになった。付近一帯は回教徒街をなし、寺では寺子屋式の経漢（けうかん）小学校が設けられていて、其処ではアラビヤ文字を子供達に教えていた。管長様は殿堂及び斎戒沐浴場等を一々活動のレンズに収められた。(3)

その後、一行は天主堂などを見学し、天津伝道庁にも立ち寄った。そして、北平へ移動した一行は、４月６日に再び清真寺を訪れることになる。

> 四月六日　日曜　快晴
>
> 午前八時旅館を出発、佐藤布教所、東条藤井川崎布教所に御参拝になる。四君は共に天理外語の卒業生だが、純支那人となって北平（べいぴん）支那街で布教に専念している。（中略）
>
> 一旦旅館に帰って昼食の後、午後一時より北平城外の清真寺（回教）の見学に赴（おもむ）かる。丁度昨日東方文化事業研究所にて御面接の河村氏は回教信徒であり且つ同教研究の大家で、同氏が一々詳しく案内説明の労を取って下された。(4)

海外布教を志して渡航した人々や、天理外国語学校の卒業生たちも、イスラームに触れる機会があったと推測される。しかしながら、後世に記録が残されるかたちでイスラームと出会った最初の人物は２代真柱であった。この２代真柱とイスラームとの出会いは、少なからず天理教亜細亜文化研究所への創設につながったと考えられる。

［註］

（1）「亜細亜文化研究所第一回所員会議に於ける訓話」『管長様御訓話集（第３巻）』天理教教義及史料集成部、1944 年、78 頁。

（2）中山善衛「序文」、中山正善『六十年の道草』、天理教道友社、1965 年、３頁。

（3）山澤為次「日記帳より」、『みちのとも』（昭和５年５月５日号）、34 頁。

（4）同上、35 ～ 36 頁。

大統領暗殺事件 ②

天理大学国際学部教授
森　洋明　*Yomei Mori*

「北へ連れて行かれる」とは、90年代の内戦時、首都ブラザヴィルの南部地区の人たちのなかで恐れられていた表現である。「北」のどこかで秘かに「葬られる」こと、つまり「処刑される」といったニュアンスがあるからだ。90年代に複数政党制が導入されると、独裁制のなかで抑えられていた部族のアイデンティティが刺激され、南北の対立が表面化する状況のなかで出てきた表現である。

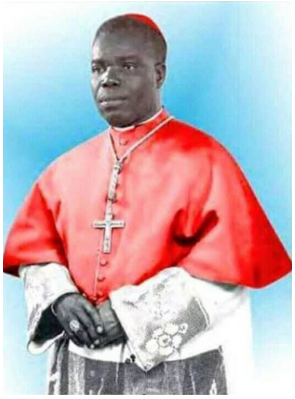
北と南との緊張関係は、1960年の独立以前からすでにあった。コンゴでは「nordist」（北出身者）と「sudist」（南出身者）という表現で、出自の違いが言い表されている。これはアメリカ南北戦争に使われていたフランス語の表現から来たものだ。コンゴはまた言語的に見ても、北のリンガラ語に対し南のキコンゴ語と大きく二分することができる。植民地時代は、大西洋へのアクセスがあり、内陸からの物資輸送の鉄道が敷設されている南の人たちが、経済活動や行政への関与の面で北の人たちより有利な立場にあったと言えるだろう。独立後、初代と二代の大統領が南出身者だったのにはそうした背景があったと思われる。植民地のいわゆる「分断統治」によって、またヨーロッパの都合で決められた「国境線」が独立後もそのまま「一つの国」として固定化されたことによって、一つの国のなかで出自による差、民族による格差が生まれたのである。

独立後3代目の大統領となったマリアン・ングアビは北出身者である。1977年3月18日、その大統領が暗殺されたのだから、南側の仕業だと見なすのは必然的な流れだったのかもしれない。しかも暗殺の実行犯は、その真相を明かすことなく殺害されてしまったため、だれが暗殺の黒幕なのか分からない状況で、よりいっそう南側の関与が疑われたのではないだろうか。そして実際に南出身で重要な立場にあった2名が、「北」のどこかで「葬られる」事態に発展するのだった。

真っ先に疑われたのは、マサンバ・デバ前大統領だった。ングアビ大統領が暗殺された数時間後には、彼の身柄は軍によって拘束された。そして取り調べのなかで、彼は暗殺計画を「自供」したのである。ただそのときの証人によれば、拘束されている間、前大統領はかなり酷い拷問を受けたと言われている。大統領に代わる暫定的な「党軍事委員会（Comité militaire du Parti）」が主導する軍法会議によって、彼に暗殺の首謀者として死刑が宣告された。そして3月25日の夜、人知れず秘かに刑が執行されたのだが、どこで、どのようにされたのかは明らかになっていない。また、彼の遺体は家族のもとに返されることもなかった。彼はまさしく「北」によって「葬られる」ことになったのである。

もう一人は、コンゴで初めて枢機卿になったエミール・ビアエンダ（Emile Biayenda）である。キンダンバ（Kindamba）生まれのいわゆる「南出身者」であった彼もまた、大統領暗殺事件に関連して「北へ連れて行かれる」運命にあった。

ビアエンダは1927年に生まれた。1937年から1944年までカトリック系学校に通った彼は、将来の司祭になることを決意し、さらにカトリック系の学校に進み、首都に出て神学や哲学を学んだ。1958年10月26日、聖職者（prêtre）の資格を得て、首都の第5区であるウエンゼ（Ouenzé）に配属された。1959年には助任司祭（vicaire）となり、その後さらに司祭（abbé）から主任司祭職（curé）へと順調に昇級していった。1965年10月から1969年5月までは、フランスのリヨンで神学を学び、神学の博士号を取得した。ブラザヴィルに戻った彼は、1970年3月に大司教となり、やがて1973年3月、パウロ6世法王によって枢機卿に任命された。当時、アフリカ大陸のなかでも一番若い枢機卿（cardinal）であった。


エミール・ビアエンダ枢機卿

こうした彼の影響力が社会のなかで大きくなっていくとともに、独裁政権は政治的な混乱を引き起こしかねないとして、政府から警戒されることもあった。実際に拘留されたり、拷問にかけられたりしたこともあったようである。また、拷問による深い傷は生涯残っていたという。

1977年3月22日の夜、突然3人の軍人が彼を車で連れ去り、北へ続く道を進んだ。大統領暗殺事件から4日目の出来事である。彼はその時すでに自身に降りかかろうとしている「運命」を察知していたとも言われている。枢機卿が実際どこでどのように殺害されたのかは、さまざまな説がある。ただ、彼の遺体には銃弾の跡や致命傷となるような傷跡がなく、また衣服も血で汚れていなかったようである。そのことから、生きたまま埋められたのではないかと言われたり、あるいは、銃弾は放たれたが彼の身体に決して当たることはなかったといった「奇跡」話も生まれたりしている。

なぜ、彼が殺されてしまったのか？　理由は大統領が暗殺される30分前に面会したのが彼だったからだ。そのことによって彼が大統領の暗殺の実行犯と思われたのである。そこには、彼が南部出身で政治的に危険視されていたということも影響していたのかもしれない。また彼は共産化を進めるデバとングアビの2人の大統領に対して、その道を断念するように説得したという説もある。さらには、彼が大統領の「力」を呪（まじな）いによって「取り除いた」という説もあるようだ。いずれにせよ、実行犯は殺害された大統領側近の軍人だったが、党軍事委員会はこの枢機卿殺害を糾弾し、暗殺された大統領と合わせて国家的な喪に服すことを宣言した。

現在、ブラザヴィルの北方に「エミール・ビアエンダの丘」と呼ばれる小高い丘がある。枢機卿が生きたまま埋められたと言われている丘である。そこには記念碑や十字架が立てられ、今日では彼の思いを受け継ぐ人たちにとっての重要な巡礼地となっている。一方、デバ大統領の名誉は1991年の国の全権会議で回復した。ただし、彼の遺体がどこに葬られているのかは、未だ明らかにはなっていないようである。街の中心にあるマリアン・ングアビ大統領の霊廟と比べると、その扱いの差は歴然としたままである。

エミール・ビアエンダの丘

遺跡からのメッセージ（57）

世界共通の危機に際して、新入生、在学生へのメッセージ

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

新型コロナウイルス（COVID-19）が世界中で猛威を振るう未曾有の非常事態となっている。クラスターの発生が各地で多発している状況を受け、安倍首相が記者会見で、全国の小中学校や高校、特別支援学校を対象に、3月2日から春休みに入るまでの臨時休校を要請したのは2月29日のことだった。3月20日には、その方針を延長しない方針が確認されたものの、その後も、世界的な感染拡大が止まらず、7月～8月に開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックは、3月24日、1年間ほどの延期が正式に決定した。全土の封鎖が3月9日に決まったイタリアでは、「医療崩壊」の危機に瀕し、3月31日、封鎖の措置が4月12日まで延長されて現在に至っている。日本でも、3月末から感染者数がうなぎ登りに増加し、本稿執筆中の4月5日11時の時点で、国内の感染者数が3,271人、東京都では、1日（前日）の感染者数が118人と発表されるなど、都市圏においては「指数関数的増加」の兆候が見え始め、爆発的増加（オーバーシュート）の危機が迫っている。

天理大学では、クラスターの発生を避けるため、3月6日、卒業式の中止を決定し、学科・専攻・研究コース等に分かれた学位記授与を行うことを決定していたが、3月10日、対面での卒業証書・学位記授与も断念し、郵送で卒業生に送付することになった。また、3月13日、入学式の式典中止も決定され、3月30日には、新学期の授業開始が連休明けの5月7日と決定された。3月31日、4月1日に予定されていたオリエンテーションも、3週間延期となり、4月20日まで不要不急の学生の学内への入構が禁止された。前例のない非常事態を受けて、筆者の所属する歴史文化学科では、緊急に、自宅で待機している新入生・在学生に向けて教員からメッセージを届けることになり、その第一弾として、4月2日、戦国武将の三好長慶や松永久秀の研究で著名な天野忠幸准教授（歴史学研究コース）からのメッセージが大学のwebサイトに掲載された。戦国時代を研究する天野先生らしく、自宅に「籠城」中でも、日本史（中世＝鎌倉・室町・戦国時代）を楽しめるよう、レポート作成や読書のアドバイスを行っている。

新入生・在学生に対する教員メッセージの第二弾は、不肖、私からで、4月3日、大学のwebサイトに掲載された内容を、一部省略しながら紹介しておきたい。

「新入生のみなさんは、天理大学歴史文化学科へのご入学、誠におめでとうございます。せっかく大学生になれたのに、入学式も中止になり、授業開始も連休明けからになってしまいました。新学期を迎えたというのに、今年は何もかもがいつもと違っていて、学生のみなさんばかりでなく、私たち教員も大変戸惑っています。私の専門は考古学ですが、日本と外国の両方でフィールドワークに携わっています。世界共通の危機の今、海外の研究仲間や友人たちと、メールやSNSで互いに励まし合いながら、世界がつながっていることを実感しています。」

「新入生のみなさんには、春学期には、『考古学概論』の授業でお目にかかる予定になっています。教室でお会いできることを楽しみにしていますが、今は、授業に備えて、参考になるビデオを紹介しておきましょう。ご存じのように、天理大学には附属天理参考館という素晴らしい大学博物館があり、自宅からでも参考館の収蔵資料の解説ビデオをYouTubeで見ることができます。天理参考館のHPに『参考館動画』というコーナーがあり、そこを入り口にして、さまざまなビデオを見ることができます。このビデオは天理大学・参考館ならではのオリジナル・コンテンツとなっていて、考古学を勉強しようと思うみなさんへのおすすめは、『発掘作業』（『天理参考館のこころ』11）です。もちろん、他にもたくさん、選りすぐりのビデオがあって、考古学や民俗学の学びのきっかけになってくれることと思います。」

「参考館動画」
（天理大学附属天理参考館のwebサイトから）

「考古学・民俗学研究コースに配属になる2年生のみなさんには、今春は、『考古学･民俗学研究入門1』の授業でお会いします。（中略）。授業では、天理参考館の展示資料を、受講生のみなさんに選択してもらい、レジメを作成して、研究成果を発表してもらいます。（中略）。今のうちに、『参考館動画』にある『天理参考館この一品』（全39回）、『天理参考館のこころ』（全41回）を見て、どの資料を選ぼうかなあ、と考えておいてください。」「3年生のみなさんは、いよいよ、卒論に向けて、自分の専門テーマを絞り込んでゆかなければなりません。卒業後、『大学で何を勉強したのですか』と聞かれたときに、自信をもって、『私は考古学を勉強しました。卒論では○○を研究しました』と言えるようになってもらえたら、と思っています。」『4年生のみなさんも同じ事ですが、いよいよ、本格的な準備と作業が必要です。担当の先生と連絡を取って、課題を進めてもらえればと思います。」

これから公開される予定の小田木治太郎教授（考古学・民俗学研究コース）のメッセージでは、「戸外の空気も吸える勉強方法」として、奈良文化財研究所が運営する「遺跡データベース」を活用し、身近な遺跡の場所を調べて、現地に出かけてみることを勧めている。また、現地に行かなくても遺跡の様子を知れるwebサイトとして、天理大学の「西山古墳パノラマツアー」を紹介し、「このサイトで天理を懐かしんでください」と伝えている。このサイトは、googleで『西山古墳』と検索すればすぐ見つかるはずなので、関心のある方は、是非ご覧ください。最後に、もう一度、私のメッセージに戻っておこう。「天理大学は歴史文化、考古学･民俗学を学ぶには最高の環境です。」「近いうちに、教室でみなさんにお会いできることを楽しみにしています。今は、健康に気をつけながら、毎日を過ごしましょう。」

人類としてのこの危機を、皆が知恵を出し、乗り切り、危機が去ったあとには、『サピエンス全史』で知られるユヴァル・ハラリ氏が訴えるように（『日本経済新聞』コラム記事、3月30日）、「全体主義的な監視」「国家主義的な孤立」といった世界ではなく、「市民の権限強化」「世界の結束」の希望ある世界が実現することを切に願いたい。

COVID-19 とジェンダー

おやさと研究所
天理ジェンダー・女性学研究室
金子　珠理　*Juri Kaneko*

この数カ月、新型コロナウイルス（COVID-19）の出現により、グローバル化した世界における人間社会の脆弱性が露呈し、われわれは精神的・肉体的に翻弄され続けている。3月28日に、新型コロナウイルス感染症対策本部が決定した「新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針」の内、「（6）その他重要な留意事項」の「1）人権等への配慮」の③には、「政府及び関係機関は、各種対策を実施する場合においては、国民の自由と権利の制限は必要最小限のものとするとともに、女性や障害者などに与える影響を十分配慮して実施するものとする」と記されているが、実際には外出の自粛に伴うストレス等による、DVや虐待の増加がすでに報告されている。外出禁止令の出たフランスや中国湖北省でも事態は同様で、コロナ問題は世界的なジェンダー問題となっている。国連・女性に対する暴力に関する特別報告者は、3月27日、懸念を表明し、各国政府に対応を求めた。日本では、NPO法人「全国女性シェルターネット」が、3月30日、政府に対し要望書を提出している。2019年1月の千葉県野田市の小4児童虐待死事件で明らかなように、児童虐待の背景にはDVがあり、児童虐待とDVは、セットでとらえなければならない。たとえDVがなくとも、ワンオペで子育てをする女性のストレスは限界に達し、子どもへの虐待リスクは高まり、親子双方への支援が喫緊の課題となっている。さらに言えば、外界から遮断された空間での生活を余儀なくされている多くの女性のたちの、リプロダクティブ・ライツが脅かされていると思われる。

堕胎罪はなぜ問題か

これまで3回にわたり、1970年代と1980年代の優生保護法改定阻止運動について概観してきたが、1970年代のウーマン・リブを継承し1980年代に登場した「阻止連」（82優生保護法改悪阻止連絡会、現「SOSHIREN女のからだから」）は、当面の改定阻止にとどまらず、根本的には刑法堕胎罪の廃止を、現在もなお強く訴え続けている。では一体、刑法堕胎罪はなぜ問題なのだろうか。

1907年（明治40）に制定された刑法堕胎罪（第29条）は、1948年に優生保護法が成立した後も存続し、今なお有効である。中絶が焦点となった、1994年の国際人口開発会議（カイロ）にて、優生保護法（現母体保護法）を持つ日本は中絶天国との非難を浴びた。それゆえに一見、日本では中絶が自由に大量に行われており、この「堕胎罪」自体が空文化している印象を与えかねない。たしかに日本では中絶は条件付きで合法である。しかし、中絶は女性の意思で「自由に」行われているわけではなく、その根拠は母体保護法内の「経済条項」の緩い解釈に基づく、極めて危うい状態に置かれている。それは「患者の求めや希望によって行うものではない」「中絶の適応があると指定医師が判定した場合にのみ行うべき」（『指定医師必携』より）ものとされており、また実施にあたっては配偶者の同意が必要である。少子化対策などといったその時々の政策により、ひとたび経済条項の解釈が厳密になされるならば、堕胎罪が中絶行為に対して適用され、女性および医師が処罰される。その際、妊娠の相手男性側は何も問われないという、性の非対称性をも含んでいるのである。

実際に、堕胎（中絶）の実態と歴史を調査している塚原久美によれば、「21世紀に入ってからも平均して年に1人は堕胎罪で起訴されている」という。刑法堕胎罪では、女性が薬物を用いた堕胎を犯罪としており、例えば、2010年11月には、中絶薬（日本では未認可）をインターネットで購入し、自ら服用して中絶した都内の女性が堕胎容疑で書類送検されている。これはさながら、かつてヨーロッパにおいて、堕胎薬の知識を持つ女性に対して行われた弾圧を思わせるものとなっている。「1980年にフランスで開発された中絶薬ミフェプリストン（RU486）を用いた中絶は、いまや世界では吸引と並ぶ主流の中絶方法になっているが、日本ではまだ認可されていない」と塚原は述べる。塚原によれば、先進国ではすでに中絶薬が主流となり、1970年代にはほぼ全面的に技法も「掻爬D&C」から「吸引」へと移行し、途上国でも2003年頃からWHOが推進する、安全性の高い「中絶薬か吸引」に次々に切り替えられ、その結果、中絶の早期化が進みスティグマも緩和されてきた、という。しかし日本では相変わらず、それらへのアクセスが難しく（2010年時点で初期中絶の8割が掻爬）、多くの女性たちは、この実態を知らずにこれまできたのであった。

カトリックの変化

周知のように、カトリックは、人間のいのちが受精卵から始まるとし、いかなる理由での中絶も罪であり、殺人であるという立場を堅持している。しかし大嶋果織によれば、『いのちへのまなざし 増補新版』（カトリック中央協議会、2017年3月）からは、微妙な変化も読み取れるという。中絶経験者に対する態度が、「断罪」から「ゆるしと寄り添い」へと変化し、防止の取り組みも重要視されてきた、と大嶋は指摘する（『世界代表司教会議第14回通常総会報告』2015年参照）。実際に、厳格なカトリック教会の力が強いアイルランドにおいて、2018年に国民投票によって中絶が合法化され、また2019年には、北アイルランド議会（イギリス）も中絶合法化を決議したことは、その表れかもしれない。

さらに東アジアでも、第2次世界大戦終結後に刑法堕胎罪が制定された韓国では、2019年4月、刑法堕胎罪に対して違憲判決が下され（最高裁）、2020年末までに中絶法が改正される予定という。このように「世界では明らかに女性の権利としての合法的中絶を認めるトレンドがある中、日本のみが議論さえ始まっていないのは、じつに異様なことである」と塚原は述懐している。COVID-19は、女性や障害者などに対して問いを投げかけている。日本における女性たちのリプロダクティブ・ライツの状況も、この機会に考えてみた次第である。

［参考文献］
「外出禁止令のフランスで急増するDV―政府が対策を発表」、『クーリエ・ジャポン』 2020年3月29日。「外出自粛 高まる「家庭リスク」」、『朝日新聞』2020年4月1日。
塚原久美「日本における中絶の実態」、『福音と世界』2020年3月号。
塚原久美『中絶技術とリプロダクティヴ・ライツ』勁草書房、2014年。
大嶋果織「キリスト教とリプロダクティブ・ヘルス＆ライツ」、『福音と世界』2020年3月号。

天理参考館から（20）

スポーツの歴史と文化（1）「走る」その１

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

東京 2020 オリンピック・パラリンピックが新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響を受けて１年延期となった。天理参考館では天理図書館と共に創立 90 周年を迎える本年、併せて日本でのオリンピック開催を記念し、スポーツの歴史と文化を繙く特別展の開催を企画した。残念ながらオリンピック・パラリンピックは 2021 年夏に開催延期となったが、世界各地の生活文化資料と考古美術資料を収蔵する当館ならではの視点で、「スポーツ」とは何か、人々を熱狂させ、心をとらえて離さないその魅力について特別展で迫りたい。

現代の私たちが「常識」と思っている事柄が、ほんの 100 年前までは途方もない「非常識」であった場合も少なくない。スポーツについても例外ではないだろう。グローバル化した「近代スポーツ」と対極を成す、特定の民族や地域に固有の伝統的な「民族スポーツ」について、その歴史も含め、関連する資料を今号から連続して紹介していく。

オリンピックは元々、古代ギリシアでゼウス神を喜ばせるために始まった競技大会だと言われている。男子だけが参加を許され、選手も審判も観客もすべて男性。しかも選手は一糸まとわぬ全裸で走ったり跳んだり投げたりしたと伝わっている。現代では異様に思えるが、みんな大真面目で、このような全裸の競技大会が千年もの長きにわたって開催されたのである。神に愛される美しい肉体を見せるのがギリシア人の誇りであり、恥ずかしがるのはバルバロイ（異民族）だと軽蔑した。この伝統ある競技大会を破壊したのがキリスト教である。ローマ国教となったキリスト教は異教信仰に基づく祭祀であるとして古代オリンピックを禁止し、神殿も破却した。その後、キリスト教はヨーロッパ全域のみならず世界中をキリスト教化すべく全精力を注ぎこむ。その武力を担ったのが騎士たちであり、その騎士の子孫が貴族である。

古代オリンピックが消滅しておよそ 1500 年の後、「オリンピック」として復活させたのがフランスの貴族、ピエール・ド・クーベルタン男爵だったというのもある意味皮肉なことと言える。彼が提唱した近代オリンピックの第１回大会が開催されたのは第一次世界大戦前の 1896 年であり、クーベルタンはじめヨーロッパ貴族たちが準備を進めたオリンピックに選定した競技種目は、当然ながらヨーロッパを中心とするスポーツ文化を反映したものであった。近代オリンピック第１回アテネ大会で実施された競技は、陸上、水泳、体操、自転車、フェンシング、レスリング、テニスの７種目で、古代オリンピックに倣うというよりは、当時ヨーロッパで盛んだった種目、クーベルタンたちが親しんでいたスポーツを選択している。クーベルタンたちは特権階級であり、彼らが親しんでいたスポーツとはお金がかかるものであり、特権階級に有利なスポーツが採用されたと言える。第２回のパリ大会（フランス 1900）、第３回のセントルイス大会（アメリカ 1904）はともに万国博覧会の添え物として開催された。パリ大会では万博会場へ人の流れを誘導するために隣のブーローニュの森で陸上競技が行われており、当時はまだスポーツやオリンピックに対する一般の人々の関心が薄かったことがわかる。

さて第１回大会は「古代オリンピックを復活させて近代オリンピックを開催する」と主張する以上、アテネで開催しなければ格好がつかない。そこで古代ギリシアのマラトン（アッティカ半島東部の地名）の故事を聞いたクーベルタンが陸上競技にマラソンを採用することを提案した。その故事とは、紀元前 490 年アテネがアケメネス朝ペルシアを迎え撃ち、絶体絶命のマラトンの戦いでペルシア軍を撃退して勝利した際に、健脚の兵士がアテネまで駆けて「我らは勝利せり」とエヴァンゲリオン（吉報）を告げて絶命したというものである。近代オリンピック競技種目に古代オリンピックに由来するものはほとんどなく、それまで冷ややかだったギリシアの態度はマラソン採用で一変した。第１回アテネ大会ではマラソン出場者の大半をギリシアが占め、沿道の声援は熱く、ギリシアのスピリドン・ルイス選手が優勝した瞬間は 2400 年前もこうであったかと思わせる大歓声がアテネに響きわたった。当時の兵士がどこからどこまで走ったのかは正確にはわからないが、マラトンからアテネまでの距離を測ったらおよそ 40km だったので、その距離で競争を復活させようということに落ち着いた。現在の 42.195km に統一されたのは第８回パリ大会以降のことである。42.195km 走るには体が軽く、かつ筋力がしっかりしているのがベストな状態とされるため、マラソン選手はレースに向けて体重を極限まで絞り込んでいく。極限状態にあるため、レース途中で水分を補給しなければ脱水状態に陥ってゴールにたどり着けない過酷な競技である。

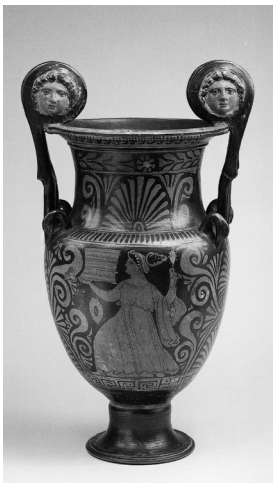


図　高さ 48.0cm
紀元前４世紀頃

「走る」にまつわる資料として挙げるのは、ギリシア陶器の一種で、混酒器の赤絵式渦形クラテル（図）。紀元前４世紀頃のものと伝わるのでマラトンの戦い以降の作である。「ギリシア陶器のほとんどは副葬品として墓地から、あるいは奉納品として聖域から出土したもので、住居跡から出土する日用品とは異なり、精巧に形づくられ、見事な文様や絵画で飾られている。そこに描写された内容は各時代背景や人々の思想が密接に関係し、技術の進歩にともなって表現方法が発達していく中で、ギリシア陶器の歴史は展開していくのである」（天理ギャラリー第 138 回展図録『ギリシアの古代美術』2009: p.6）。ここには右手にキスタと呼ばれる容器、左手に鏡を持って走る女性が描かれている。このフォームは、現在のように右手と左足、左手と右足を出す「逆ひねり」を利用した走り方ではなく、右手右足と左手左足を同時に前へ送り出すいわゆる「なんば走り」である。日本古来の走法が実は古代ギリシアでも存在したとは！おそらく手足の左右を変えて走ろうとすれば長いスカートが足に巻き付いてしまったのではないだろうか。「時代背景や人々の思想が密接に関係」した表現として大変興味深い。

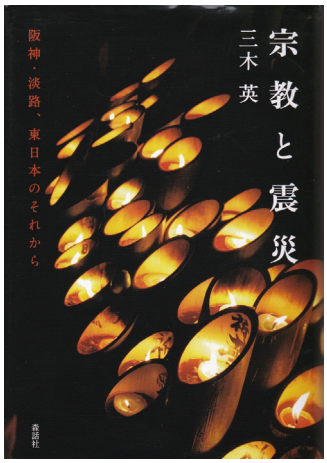
〈図は天理参考館蔵品〉

復興・宗教・ニューカマー―三木英の近著に見る宗教社会学の最前線―

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

大阪国際大学教授の三木英（ひずる）による宗教社会学研究は、近年、「震災後の宗教」と「ニューカマーの宗教」という二つの極をめぐって展開している。本稿では、近年次々と刊行された三木氏の著作から、単著１冊と編著書２冊を紹介したい。これらはこの２つの軸でそれぞれ展開し、そして両者が発展融合して「復興・宗教・ニューカマー」に関する研究へと至っているのである。

『宗教と震災―阪神・淡路、東日本のそれから―』（森話社、2015 年）



『宗教と震災』

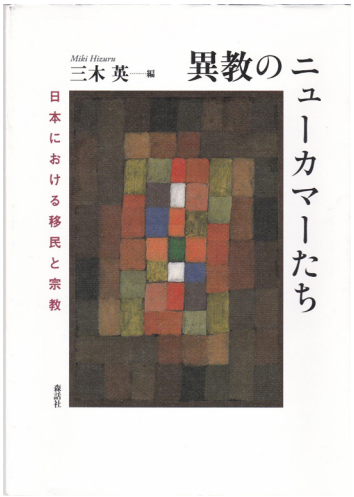
本書は「震災後の宗教」研究についての単著である。三木氏は、時間の経過とともに「元・被災地」となった被災地での宗教性の変容の姿に着目した。緊急支援においては、天理教災害救援ひのきしん隊など宗教の活動も目立つが、この時点では宗教的支援といっても、傾聴など心の支援もあるものの、一般のボランティア活動とあまり相違することはない。この段階が終われば、支援のあり方も復興支援へと変化していき、やがて被災地の生活が日常に戻るにつれて、日常支援となっていく。さらに時間の経過とともに、いかなる大災害も歴史的出来事へと変容する。しかし、災害の爪痕は人々の記憶に残り、そこに慰霊祭や追悼行事が行われ続ける意味も存するのである。

本書は３部構成で、終章を含め全９章からなる。第１部「大震災と教団」では、阪神・淡路大震災および東日本大震災における宗教団体の動きを概観する。第２部「被災者による被災者の救い」では、記憶を共有する被災者が祭りや巡礼の行事を通じてお互いに心魂の救いを得ていく様子を取り上げる。第３部「震災記憶の風化のなかで」では、被災地の宗教の活動や意味の変容を行っている。第２部・第３部は、主に神戸での参与観察の報告が行われており興味深い。終章「不慮の災害と宗教の可能性」は、上記の研究から見えてきた被災地における宗教の課題について総括する。

『異教のニューカマーたち―日本における移民と宗教―』（森話社、2017 年）

本書は「ニューカマーの宗教」研究についての共編著である。在日華僑や在日コリアンのような旧来の外国人（オールドカマー）に対して、近年さまざまな国や地域から来た外国人が日本で定住生活を始めている。ニューカマーと呼ばれるこの新しい隣人たちは、それぞれ自国での宗教を日本に持ち込んでもいる。三木氏は宗教的ニューカマーの研究として科研費を取得し、その共同研究の成果としてこの編著が刊行された。

本書は３部構成全 14 章及び附録からなり、科研メンバーが手分けして調査を行い、そうした宗教の状況を述べている。第１部は「イスラームとハラールの広がり」（三木英、藤田智博、沼尻正之）。第２部は「台湾・ベトナム・スリランカから来た宗教」（三木英、岡尾将秀）。第３部は「韓国・ラテン・フィリピン・旧ソ連発のキリスト教」（中西尋子、三木英、藤田智博）。どの章も教えられることが多いが、とくに第３部でニューカマーの韓国系キリスト教を取り上げ、韓国人宣教者と日本人信者の双方にインタビュー調査を行っている第 10 章・第 11 章（どちらも担当は中西尋子）は、日韓関係の歴史的背景なども踏まえて考えると、とても興味深いものがある。



『異教のニューカマーたち』

『被災記憶と心の復興の宗教社会学―日本と世界の事例に見る―』（明石書店、2020 年）

本書は、「震災後の宗教」（『宗教と震災』）と「ニューカマーの宗教」（『異教のニューカマーたち』）との研究成果を総合させ、さらに一歩研究を深めた編著作である。本書は、「傷ついた心の復興及び惨事の記憶の継承」に関する科研共同研究の成果として著された。

第１章と第２章では、国内及び国外の「旧被災地における惨事の記憶」として、濃尾地震から伊勢湾台風に至る自然災害と信楽高原鉄道列車事故、インド洋津波（インドネシア、タイ）とカンタベリー地震の被災地（ニュージーランド）の被災地の取材報告を行い、これを踏まえて第３章で「惨事の記憶継承における宗教の役割」を論じる（以上、三木英）。第４章は、四川大地震や青海大地震における宗教の救援活動と震災の記憶継承について扱う（川田進）。種々の取材制約を乗り越えてなされた現代中国における宗教の震災支援の報告は、とても貴重なものだ。第５章は、東日本大震災被災地で行われているアートによる追悼の営みを取り上げている（渡邊太）。人々の宗教心はアートという形で表現され、それは「拡散宗教性」と位置付けられる。第６章は在日スリランカ人の上座仏教による国際的な被災者支援の状況について論述する（岡尾将秀）。

現在、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっている。しかしこの疫災もいつかは終結する。そのとき、日本の宗教、世界の宗教はどのように犠牲者の慰霊を行い、追悼儀礼をしていくのだろうか。

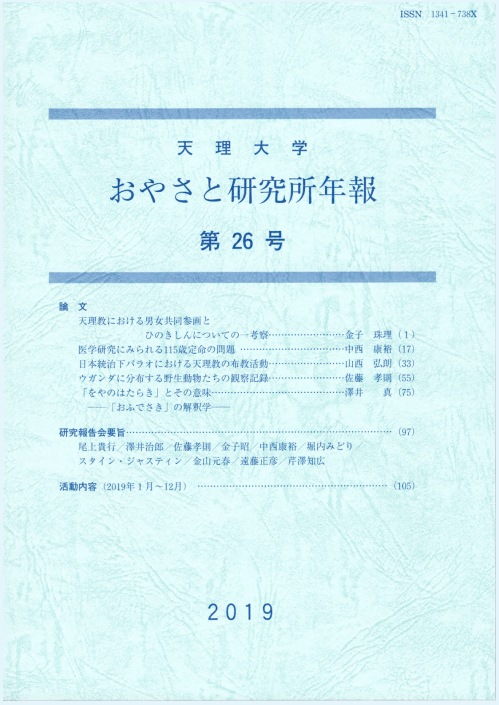
『被災記憶と心の復興の宗教社会学』

新　刊　紹　介

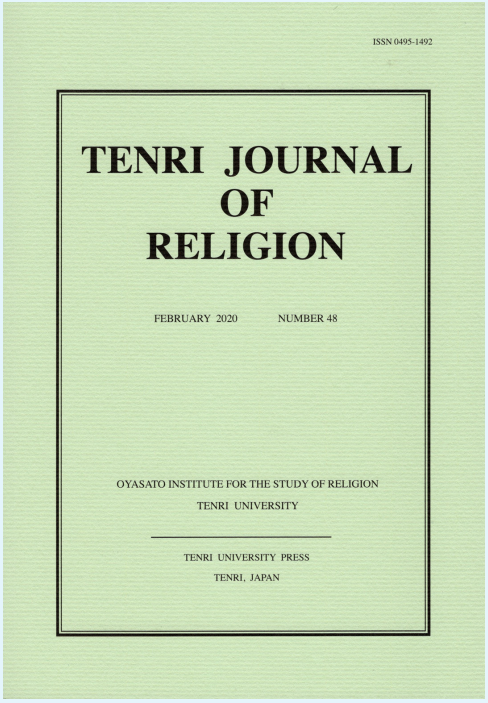
令和元年度の出版として、おやさと研究所では『おやさと研究所年報』第 26 号、伝道参考シリーズ (37)、グローカル新書（16)、『Tenri Journal of Religion』No.48 を発行しました。

内容の詳細に関しては研究所のホームページ（http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html）をご覧ください。

伝道参考シリーズとグローカル新書は道友社販売所で購入できます。『おやさと研究所年報』と『Tenri Journal of Religion』に関しては、研究所事務所にお問い合わせいただくか、公開教学講座の際にお求めください。

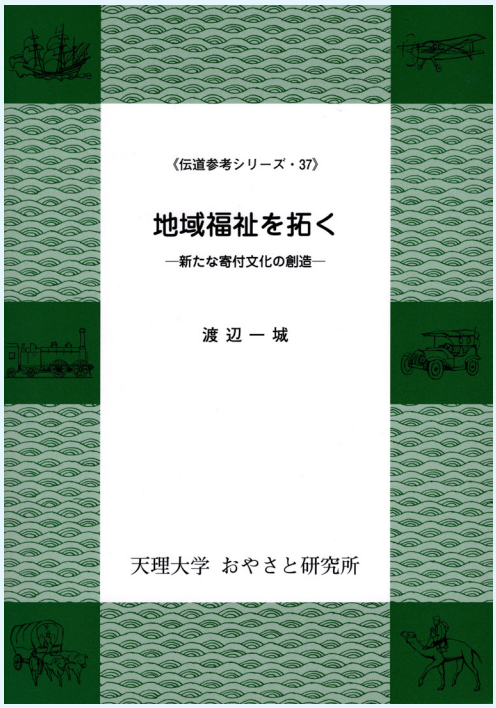


『おやさと研究所年報』第 26 号



『Tenri Journal of Religion』No.48

深谷耕治著
グローカル新書 16
『「おふでさき」の動詞からの探求』
（本体 800 円＋税）



渡辺一城著
伝道参考シリーズ 37
『地域福祉を拓く一新たな寄付文化の創造一』
（本体 700 円＋税）

天理大学おやさと研究所

2020 年度公開教学講座

信仰に生きる　『逸話篇』に学ぶ（６）

ご来場くださる皆様へ

新型コロナウイルスの影響により、

日程を９月からの開催に変更しました。

ご理解くださいますようお願い申し上げます。

第１回：　９月 25 日（金）
永尾教昭所長　75「これが天理や」

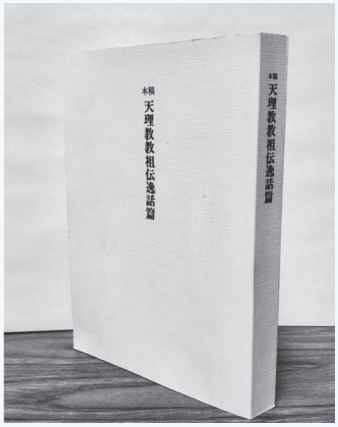
第２回：　10 月 25 日（日）
佐藤孝則研究員 77「栗の節句」

第３回：　11 月 25 日（水）
岡田正彦研究員 88「危ないところを」

第４回：　12 月 25 日（金）
澤井真研究員　93「八町四方」

第５回：　１月 25 日（月）
八木三郎研究員 106「蔭膳」

第６回：　２月 25 日（木）
堀内みどり主任 103「間違いのないように」



場所：天理教道友社６階ホール

時間：午前 10 時～ 11 時 30 分

＊お車でのご来場はご遠慮下さい。

グローカル天理
第 21 巻　第５号　（通巻 245 号）
2020 年（令和２年）５月１日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan